

未来を考える力を **気仙沼復興レポート⑩**

# 震災遺構とは

被災地からの視点で復興の課題を考える「気仙沼復興レポート」。第10弾は、津波の猛威を伝える「震災遺構」について問題提起する。気仙沼市では復興交付金を活用した震災遺構として、気仙沼向洋高校の被災校舎の保存を検討しているが、最大の課題は維持管理の費用だ。鹿折地区に津波で打ち上げられた巻網漁船「第18共徳丸」の保存を断念した理由、南三陸町の防災庁舎保存を巡る賛否とともに、震災遺構の意義を探った。

## 候補は気仙沼向洋高

東日本大震災の大津波で無残な姿となった気仙沼市沿岸部。震災直後はガレキを片付けることで精いっぱいだったが、津波の爪痕が消えていくにつれ、震災遺構の保存が注目されてきた。最初は鹿折地区に打ち上げられた巻網漁船「第18共徳丸」の保存が検討されたものの、船主の強い信念によって解体され、その次に気仙沼向洋高校の被災校舎が候補に挙がった。

気仙沼向洋高校は農漁業を中心とした階上地区の沿岸部にあった。昭和52年に建設された校舎は老朽化耐震性に問題があり、平成23年3月は耐震補強を中心とした大規模改修が行われ、授業の一部は校庭に建てられた仮設校舎を利用していた。地震が発生したのは3学期最後の授業の後で、1・2年生220人のうち約160人が部活動などで学校に残っていた。

### ■全生徒が無事

残っていた生徒は近くにある地福寺にいったん避難した後、JR陸前階上駅へ、さら



に高台の階上中学校へと教職員が機転を利かせて移動させたことで、全員無事だった。大切な書類を上階に移動させるために残った教職員、そして校舎改修工事の関係者ら、家ごと漂着した住民ら計51人は、屋上へ逃げて難を逃れた。この日は入試の合格に向けた準備、大規模改修によって校舎へ生徒は立ち入り禁止となったことで、計画していた校舎4階へ生徒が避難できなかったことが高台避難につながったという。

新たな校舎は内陸へ建設することが決まった。被災した校舎は県教育委員会が解体する予定だったが、この校舎で誰も犠牲にならなかったことで、地域から震災遺構として望む声が出た。

## ■地域振興の拠点に

震災後に発足した階上地区まちづくり協議会は平成26年2月14日、まちづくり計画提言書を完成させた。地域住民が専門家のアドバイスを受けながら話し合ってまとめた地域の将来像は、行政への要望だけでなく、地域が取り組むことも盛り込んだ内容となった。

この計画の中で、震災を後世へ伝えるため、気仙沼向洋高の被災校舎を震災遺構として保存することを提言。教室に震災・復興の記録を展示し、被害の少ない校舎は階上観光協会の事務所として活用するとともに、校庭は芝生の多目的グラウンドにすることで、防災と地域振興の拠点とすることを目指し

ている。学校一帯を「はしかみセントラルパーク」とする構想だ。

この地区は明治三陸津波で大きな被害を受けた歴史があり、地元の階上中学校は防災教育に力を入れ、国内外から注目されてきた。防災に対する地域の思い入れは強く、被災校舎を保存して教訓を後世に伝えていくという考えが自然と受け入れられたのである。

## ■遺構検討会議を設置

第18 共徳丸のことは後で詳しく記述するが、遺構候補だった船体が解体されたことを受け、気仙沼市は平成25年11月に東日本大震災伝承検討会議を設置した。津波の猛威や震災の教訓をどうやって次の被災地や後世に伝えていくのかを考えることが目的で、大



冷凍工場が激突した南校舎壁面



南校舎3階の漂着した車



南校舎1階



北校舎

※宮城県震災遺構有識者会議で示された写真。校舎4階に水産加工場がぶつかった跡があり、「想像を絶する津波の破壊力という発信力がある。車が3階に残ったままなのでインパクトもある」と評価された。一方で、維持費を心配する意見も多かった。

学教授や文化財保護審議会委員、観光関係者らが3回の会議を開き、26年5月に報告書をまとめた。

この時点での震災遺構の候補となる構造物は、気仙沼向洋高校だけでなく、小泉海岸にあるシーサイドパレス(海の上に浮かぶように残されたレジャー施設)、気仙沼大川の橋台だけ残ったJR気仙沼線の鉄橋、破壊された面瀬川水門もあったが、復興交付金を活用して保存できる遺構は1自治体1つというルールがあった。

地域からの要望もあり、市は遺構候補を気仙沼向洋高の被災校舎に絞り込んだ上で、26年10月に東日本大震災遺構検討会議を設置し、保存と活用の方法を検討している。伝承検討会議のメンバーに階上地区の代表が加わった構成で、来年2月まで保存整備計画案



気仙沼向洋高校の震災当時の様子は、宮城県教委HP「県立施設の震災対応」で紹介されているほか、学校が記録誌を発行している。写真は県教委HPから引用。

をまとめ上げ、それをもとに市が年度内に保存の是非を決定する。

11月の第2回検討会議では、現地調査の速報結果として、鉄骨の腐食やコンクリートの老朽化の状況、不同沈下の有無などから、「設計基準強度をすべて上回っていると思われる」と報告した。今後、報告書が作成され、12月下旬に保存方法が提案される見込み。

## 保存費用は国負担

復興庁は25年11月、震災遺構の保存に必要な初期費用を復興交付金で支援する異例の方針を決めた。過去の事例にならって保存費用は自治体負担か寄付に頼るしかないという状況下で、第18共徳丸をはじめとする貴重な被災物が次々と解体・撤去されていく中、消極的な姿勢を一変させた。ただし、1自治体1つ、初期費用に限定し、当時の根本復興大臣は「今回は異例の措置。地域の財産として市町村が責任を持って維持管理に当たってほしい」と釘を刺している。

復興交付金の対象とした初期費用は、解体費程度という制限が付いた。気仙沼向洋高校の校舎解体費は約4億7000万円。これだけ高額なのは、南北につながる4階建ての校舎、3階建ての総合実習棟などが残っているため。解体費用で保存をできたとしても、いずれ解体することになれば同じような費用が

気仙沼市の震災遺構の保存検討結果		26年5月
候補	所有者	保存可能性と判断理由
気仙沼向洋高の校舎	宮城県	△ 県教委との協議により、市で保存要望であれば柔軟に対応との回答あり。ただし、全体保存だと多額の費用負担が見込まれる。
大川のJR気仙沼線鉄橋	JR東日本	× 気仙沼線復旧に向け協議中であり、遺構としての保存判断は困難。
シーサイドパレス	民間	× 地盤沈下や浸食等により海に水没しており、保存は困難。
面瀬川の水門	宮城県	× 保存する場合、防潮堤等の計画変更が求められるため、保存は困難。

市の負担になるのだ。

復興庁は、住民意向の集約などで保存を決めるのに時間がかかることを想定。保存の是非を決めるまでの応急修理費用も支援対象とし、結果的に解体することになった場合の費用も復興交付金で賄うことにした。国からしてみれば、県に解体費を出すのも、復興交付金で保存・解体しても、いずれも復興予算から支出するので同じことなのである。

## ■調査費 5248 万円

復興交付金の第9回配分で、気仙沼向洋高校の被災校舎を震災遺構として保存するための調査費 5248 万円が認められている。

課題は維持管理費だ。建物の中に見学者が入れるようにするのか、周囲をフェンスで囲って外から見るだけにするのかによって、管理人の配置や安全管理にかかるランニングコストもインパクトも違ってくる。



## 第 18 共徳丸解体の理由

第 18 共徳丸(総重量 330 t)は、定期検査のためにコの字岸壁に係留されていたが、津波によって 800m離れた JR 大船渡線鹿折唐桑駅前に漂着。鹿折地区は津波火災によって壊滅的な被害を受けた地区で、全長 60m もの大型巻網漁船を流した津波の威力を伝える震災遺構として注目された。

水産業のまちを象徴するモニュメントで

もあり、気仙沼市は震災 4 カ月の 23 年 7 月には、船を保存して一帯を国立震災復興祈念公園として整備することを復興大臣に要望した。船主の協力によって、周辺のガレキが片づけられても船だけは残され、いつしか観光バスなどで多くの見学者が訪れるようになった。

しかし、当時は国が震災遺構保存に対する費用負担に消極的で、周辺住民から「震災を思い出すので早く撤去してほしい」という声も出たことで保存に対する地元の合意形成が難航。見かねた船主が、住民感情に配慮して解体する方針を示した。市はドームで覆ったり、外周に樹木を植えたりすることで、周囲の住宅から見えなくすることも検討したが、ドーム案だと 8~9 億円、樹木案でも駐車場や祈念館などの整備に 5 億円程度かかることもあって状況が変わることはなかった。

## ■アンケートで 7 割反対

市は津波避難計画策定に向けたアンケートに合わせて、25 年 7 月、船を保存することに対して市民に賛否を問うた。しかし、回答した市民約 1 万 4 千人のうち、68%が「保存の必要はない」を選択。「保存が望ましい」は 16%、「船体の一部や代替物で保存」も 16%にとどまった。そして 9 月に解体工事が始まった。

保存に反対した市民からは、「維持管理費を別な震災対策に使った方がいい」などと将来的な費用負担を心配する理由の記述が多かった。震災を後世に伝える手法を問う項目(複数選択化)でも、「映像の保存」83%、「防災教育の強化」51%を選択する市民が圧倒的に多く、「被災建物・船舶などの現物保存」は 17%だった。

初期費用を国が負担しても、維持管理費の問題が解決されなければ、気仙沼向洋高校の被災校舎でも市民の理解は難しいということになる。この頃は生活再建が優先され、未

来へメッセージを残すための遺構保存は二の次という雰囲気もあった。

## 南三陸町防災庁舎の行方

南三陸町の防災対策庁舎は、3階建ての屋上まで津波が襲い、避難していた町職員ら43人が犠牲になった。庁舎に残り、最後まで防災無線で避難を呼び掛けた女性職員が全国的に大きく報道されたこともあり、多くの人々が連日訪れて手を合わせており、津波の教訓を伝える震災遺構として注目されている。

しかし、庁舎の保存を巡っては賛成と反対で住民が分裂。遺族と住民から早期解体、解体の一時延期、保存の陳情が出された。ガレキ処理の期限が迫ったことで、24年9月の町議会定例会で早期解体の陳情が採択されたことを受け、佐藤仁町長が解体を表明した。11月には解体に向けて庁舎前で慰霊祭が営まれたが、その前月の知事選で3選を果たした村井嘉浩知事が庁舎保存に意欲を示したことで、震災から3年8カ月過ぎた今も解体されないまま残っている。



### ■村井知事の思い

県の震災遺構有識者会議は、村井知事が防災庁舎保存のために設置したともいえる組織で、26年11月21日の第6回会議で防災庁舎を「震災遺構で最も訴える力がある」「世界的な慰霊の場」「国を挙げて残さなければならない」と遺構としての価値を高く評価した。

有識者会議の最終まとめは年末になる見

通したが、保存を求める意見が出たことを受け、25日の定例記者会見で村井知事は「仮に残すとなれば、どういう形で残せるのか町長と議論したい」と県として保存を支援することも示唆している。

しかし、28日には遺族有志が「解体を望む遺族会」を結成。遺族の話も聞かずに保存を求めた有識者に憤怒した声明書を発表した。震災遺構としての価値を優先するか、遺族の感情を大切にするのか、移設やモニュメント化などによる折衷案を模索するのか、庁舎保存を巡る動きは、年明け早々に再燃するものとみられる。

各市町の震災遺構候補		
宮城県	仙台市	荒浜小学校 被災集落の建物基礎
	石巻市	門脇小学校
	東松島市	野蒜駅プラットフォーム 野蒜小学校 浜市小学校
	名取市	佐々直かまぼこ工場
	山元町	中浜小学校
	女川町	旧女川交番
岩手県	宮古市	たろう観光ホテル
	田野畑村	明戸防潮堤
	陸前高田市	気仙中学校 陸前高田ユースホテル 道の駅タピック 45 雇用促進住宅
	大船渡市	時計塔
	大槌町	旧町役場

## 求められる広域連携

国は石巻市と岩手県陸前高田市に国立の追悼施設を整備することを決めた。その間に挟まれた気仙沼市の役割は何なのだろうか。特に隣の陸前高田市は、1億5千万円もの寄付を募って保存した「奇跡の一本松」をはじめ

め、国道 45 号線沿いに気仙中学校、道の駅、雇用促進住宅、ユースホステルを震災遺構として保存する計画を進めている。復興交付金だけでなく、岩手県の支援が遺構保存を後押ししているという。



陸前高田の「奇跡の一本松」

あと数年で全線開通する三陸道によって、石巻、南三陸、気仙沼、陸前高田の時間的距離は一気に縮まる。震災遺構だけでなく、観光、公共施設などをそれぞれの自治体だけで考えるのではなく、広域で連携していく発想が求められる。いずれの市町も今後の人口減少が深刻で、復興後の財政見通しも厳しく、どのように役割分担するか考えなければならないのだが、被災地の職員はみんな忙しくて、そうした動きは見えていない。それぞれの復興の動きもほとんど共有されていないのだ。

宮城県が設置した震災遺構の有識者会議は、市町ごとの遺構の価値を評価しているだけだが、市町のバランスやネットワークを考える役割も期待したい。

遺構の役割は、悲劇を二度と繰り返さないためである。復興交付金が手当てされるため、ついつい気仙沼向洋高校の被災校舎に注目が集まってしまうが、津波浸水深や海拔の

表示など、地味な取り組みも忘れてはいけない。後世に伝えるための教訓の洗い出しも必要だ。

児童と教職員計 84 人が犠牲となった石巻市立大川小学校の卒業生たちが、「被災した校舎を残してほしい」と意思表示した。気仙沼でも第 18 共徳丸でも保存を訴えた中学生がいた。「未来のために…」「忘れないでほしい…」。震災遺構保存の議論の中で決して忘れてはいけない思いである。

## 岩井崎「龍の松」保存へ

気仙沼市は岩井崎にある「龍の松」を陸前高田市の「奇跡の一本松」のように保存しようとしている。開会中の市議会 12 月定例会に、保存費用 2400 万円を計上している。

「龍の松」は津波で被害を受けて一部伐採されたが、その形が天に昇る龍のようで、しかも震災の翌年が「辰年」だったことから写真スポットとして人気を集めた。近くには気仙沼出身の横綱「秀ノ山雷五郎」の銅像があり、塩づくり体験館もあることから、観光地を盛り上げるために地元が保存を要望していた。震災の寄付金を財源にする。

市は気仙沼向洋高校の被災校舎保存だけでなく、岩井崎を含めた一帯の地域資源活用も検討している。



気仙沼復興レポートのバックナンバーは今川悟ホームページで公開中です。 <http://imakawa.net>

- ① 少子化と人口減少
- ② 防潮堤問題
- ③ 復興予算の限界
- ④ 鉄路復旧と BRT
- ⑤ 高校再編
- ⑥ 災害公営住宅
- ⑦ 仮設住宅
- ⑧ 財政シミュレーション
- ⑨ 災害危険区域